

国家と「名」の「怪物」

● 加藤 九祚

「ア メリカは広島と長崎に原子爆弾を落とすたでしよう。それなのに、どうして日本はアメリカとそんなに仲よくするのですか」

中央アジアの一国、タジキスタンの一学生から受けた質問である。私は言った。「世間の大人たちの関係、とりわけ国家間では「昨日の敵が今日の友」になるのはよくある話だよ」

これが質問の返事にならないことは自分でもよく承知している。しかし、このようにはぐらかすしか手はない。たしかに日本とアメリカの密着度は尋常ではないほどすすんでいるようだ。靖国神社参拝と憲法改変にたいする執着度は、この密着度に正比例しているように思うのは私だけだろうか。過去六〇年間の平和がこの上なく尊く思われる。

中国の反日デモがウズベキスタンのテレビに伝えられたとき、ある若者が言った。

「中国もつまらないことをするものだ。日本から援助をもらっているのだから、そんなことをしないで黙っていろは、もっともらえるのに」

うがったことを言うと思った。私は何もコメントできなかった。

人類史上、二〇世紀ほど新国家の誕生した時期はなかったのではないか。国家とは多くの場合「独立」と結びついている。そもそも、現代において「独立」は可能なのか。中央アジアでも一九九一年ソ連崩壊後、五つの独立国が誕生した。これらの国々でも、地下資源のある国とない国では、経済の格差が出ている。地上資源（水）があってもだめである。地下資源（石油、ガス）でなければ国の利益にならない。中央アジアの一国、トルクメニスタン（人口約五〇〇万）では地下資源が豊富で、電気、水道、ガス、塩は無料、ガソリンは一ドルで六〇リッター、ウオツカも自国産、外国産を問わず安い。ただしニヤゾフ大統領にたいする個人崇拜は群を抜いている。貨幣にも町にも彼の肖像があふれている。

各国とも愛国心の鼓吹はさかんである。人はみな「誰か故郷を思わざる」であると思うが、その上になお、「これでもか」の鼓吹である。

二一世紀もまた、国家という名の「怪物」が人びとの意識と生活を支配しつづけることだろう。



イラストレーション：栗岡奈美恵

かとう きゅうぞう／国立民族学博物館名誉教授。1922年、韓国慶尚北道生まれ。上智大学文学部卒業。陸軍工兵少尉。戦後4年8か月シベリア抑留。学術博士。1998年からウズベキスタンで仏教遺跡を発掘中。